

---

# ある日の主、ある日の執事

八神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある日の主、ある日の執事

### 【Nコード】

N4889E

### 【作者名】

八神

### 【あらすじ】

自販機の悲鳴が聞こえる夜に、唐突に二人は出会った。まだ青年は執事ではなく、まだ少年は主でなかった物語。

「喜べ、お前を俺の執事に任命してやる」

「……はあ……？」

土砂降りの雨の中、掌から血を流した長身の青年は、下から偉そうに見上げてくる青年よりかなり小さい少年を訝しげに見た。こいつは一体何を言っているんだろうか……とでも言いたげな表情で

「お前、何言ってるんだ……？ 馬鹿か？」

つつい口に出してしまったらしい。ナチュラルな罵倒には少々……いや、かなり本気を感じが混じっている。だが、少年は全く気にした様子もない

「馬鹿ではない。……何度でも言う、お前を俺の執事に任命してやるから有り難く思え」

「……………」

どうやら聞き間違えたわけではないらしい。執事？ 自分にこいつの執事をやれと？ 青年は頭を押さえて目の前の少年を見つつも何故こうなったのかを考え始めた

「ありがとうございましたー」

「はあ……」

青年はコンビニから出ると疲れたように溜息をついて財布の中を見た。身長180cm以上の長身に整った顔立で、装飾品等は何もつけていない。歳は16歳だが、一見するとそれ以上に見える。そんな青年だった

「今日何処かに泊まってギリギリ……か。野宿するしかないな」

青年はそう言つて野宿が出来そうな所を探す。青年は家出をしていた。本気で絶縁しようとか家を出た。後悔なんて物はない、多分心配もされていないだろう。青年は先程通りかかったベンチのある公園を思い出した

「仕方ない、あそこで寝るか。顔を隠せば補導もされないはずだ……多分……」

そんな事になったら絶対に身元を確認され、色々な事を聞き出されてから家に連絡されてしまう。つまりまたあの家と関わる事になってしまうのだ。それは嫌だった

「取り敢えず新聞紙で顔を……ん？ ……なんだあれは……」

ピッガシャン ピッガシャン

「……………」

ピッガシャン ピッガシャン

青年が暫くその様子を眺める。その様子というのは簡単に言えば、少年が自販機の前に立って同じボタンを押しまくっている。という奇怪極まりない光景だ。しかも一向に飲み物を取る気配がない…

ピッガシャン ピッガシャン ピッ ピッ

「……詰まったな……」

そう言っつて自販機を詰まらせた張本人を眺める。すると少年はニヤリと笑っつて財布から万札を取り出して隣りの自販機に入れる

「さて、この自販機も……」

「それは犯罪だっつーの！……」

思わず見ていられなくなつて少年の奇行を止めてしまった。よく見ると一つ向こう側にある自販機も詰まっている。三台目だった様だ

「何故止める、犯罪がなくなつたら法律が無くなるぞ。困るだろう」

「だからっつて犯罪を犯すな、業者が困るだろう！……」

「ふん、業者とこの国を天秤に掛ければ……」

「掛けるなよ！……」

多分要らない心配の為に業者を犠牲にするわけにはいかないだろう。

「ならば理由を改めよう。詰らせるのは俺が楽しいからだ、悪いか」

「当たり前だろうが!! てかやっぱり楽しんでたんだな!？」

何なのだろうこの少年は、中学生位だろうか小学生かも知れないが金の使い方が荒過ぎるし、何か達観した感じがする。最近の小学生はこうなのだろうか

「とにかく止めろ、警察呼ばれるぞ」

「警察が怖くて犯罪が出来るか」

「自覚あるのかよ!!」

「当たり前だろうが、貴様は阿呆か？」

青年はちょっと切れそうになりました。でも大人なので我慢します

「はあ…貴様のせいで気が萎えた。帰る」

「あーはいはい、もうするなよー」

溜息をついた少年はそう言つと身を翻して何処かへと消えていった。青年は思った。良い事したなあ…と

「……さて、そろそろ寝る準備を…」

「きいいいさああああああまあああああああつ!?!?!?!」

「……ん？」

向こうから白髪のおじいちゃん警官が危機迫る様子で走ってくる。なんだろう。何処となく青年に向かった来てるような気がした。そして目の前には犯罪後の自販機。勘の良い青年は思った、あの少年は常習犯だ、そして犯人を勘違いされてるな、と。まあつまりこれは結構いただけない状況なわけで

「取り敢えず逃げよう……」

「まああああてえええええつ！！！！！」

「……あー、カロリーが……」

青年はそんなことを言いつつ考えた。もうあの公園は使えないな……と。

「あー、もう朝か」

青年はむくりと起き上がった。結局昨日は散々追い回されて橋の下で眠る事になったのだ

「取り敢えず……金がねーな」

昨日の少年の金遣いの荒さを思い出して溜息をついた。いいところお坊ちゃまなのだろう。もう少し真直ぐに育てられなかったのだろ

うか。取り敢えず日給の出るバイトでも探すかな、と腰を上げたその時、朝の澄んだ空気に昨日の音が響いた

ピッガシャン ピッガシャン

「……………」

ピッガシャン ピッガシャン ピッガシャン

「またかよ…」

青年が音のする方を見てみると、昨日の少年が昨日と同じ表情でボタンを連打しているではないか。

「むっ、この商品は向こうで売り切れていたな。よし、誰にも買わせるわけにはいかな」

「止めるって…」

「んっ…?」

青年が近付いてそう言つと少年も気付いたようで、そちらを振り向いた

「誰かと思えば昨日の…どうした。金がなくて橋の下にでも寝ていたか?」

「今そのピンポイント攻撃は止める、そしてまた乱心か? もしかして街の自販機全部…」

「ああ、街の自販機は即チエツクだ。取り敢えず今日はまだ17台目だがな」

「……それはまたご苦労様だな……」

自販機の何が少年をそこまでさせるのか分からなかったが、取り敢えずまだ7時にもならないだろうに自販機を詰らせて回っているのは何か執念のような物を感じる

「貴様もやるか？」

「生憎金に余裕がないんだ」

「そうか」

ピッガシャン ピッガシャン

「自販機に恨みでもあるのか？」

「あるわけがないだろう。それはどんな変人だ？」

ピッガシャン ピッガシャン

「貴様こそこんな時間から何をしている」

「んー、橋の下で寝てたらこの自販機の悲鳴に起こされたんだよ」

ピッガシャン ピッガシャン

「ふむ、貴様はちまたで話題のホーレス中 生か？」

「学校とやらには行った事がないな」

「そうか」

ピッガシャン ピッ ピッ

「よし」

「なあ、なんでこんな事してるんだ？ 昨日は楽しいと言ってたが……」

「何故かだと？ そんなことは決まっているだろうが」

少年はおかしな物を見る様な眼で青年を見た。青年はもう慣れてしまったので気にしない。それに理由やらが検討もつかない

「ただの暇つぶしだ」

「……」

金持ちの考える事は理解すら出来ませんでした。というかしたくもありませんでした

「…ふむ、そろそろだな」

「そろそろ…？」

「ああ、ここから四百メートル程の所にある自販機に業者がくる。早速詰らせなければ」

「……………」

この少年は全ての業者の来る時間帯まで把握しているのか。と半ば呆れつつも少年に感心した、変人だけ。結構利発な子供かも知れないと思った、変人だけ。

「昨日も言ったがこれは犯罪だぞ？ バレたらお前が幾ら金持ちのボンボンだとしても捕まる」

「ふん……心配無用だ。俺は行く、じゃあな」

そう言つて少年は歩き始め、曲り角を曲る。少年はどうやら心配される事が苦手らしい。青年はそう推測した

「…まあ、分からないでもないけどな」

青年はその少年の背中を見送ると、苦笑とも微笑ともつかない笑みを零した

「で？ なんで俺捕まってるの？ ちなみにあの自販機は俺じゃなくて凄く馬鹿な子供がやったんだぜ？」

「自販機…？ 何の事だかわからないけど、お前は人質だ。おとなしくしてくれれば手荒な事はしない」

サングラスを掛けた何だか軽そうな男はそう言って腕時計を見た。髪は赤く染まっついていて、年齢は恐らく青年より1、2歳は年上だろう。

「まあ俺も警察は嫌だからおとなしくしてるけどよ。あーあ、腹減ったなあ。今何時？」

「お前、少しは緊張感って物をだな……」

「緊張感ありまくりだよ、腹減って死にそうだ。で、今何時？」

「……………」

「今何時？」

青年が変わらない様子でそう言うと男は呆れた様に溜息をついて腕時計を確認する

「……………十二時三十七分二十二秒……」

「昼時だな？」

「……………」

「カツ丼とか良いなあ。ちなみに俺には金がないんだよなあ」

青年は思いつ切り男の眼を見つめながら、さも独り言の様な口調でそう言った。まあつまりは……腹が減ったから買ってこい……と。

「ちなみに誰かさんのせいで食えなくなったんじゃないぞ？ 単純に金がなかったんだ。だから開放されても死…」

「分かったよ！！ 分かったから淡々とそんな絶望的な話をするなっ！！！！」

男はこめかみを引きつらせて携帯電話を取ると何処かに電話を掛け始めた。意外と面倒見がいいのかもしれない

「ピザも頼むぞー？」

「何様だっ！？ …… ああ、ピザもらしい…金？ …ないんだとき、後で返すから出しといてくれ」

「後は唐揚げ…」

「まだ食うのかっ！？」

うん、こいつは面倒見の良い奴だ。と、青年は確信した

「む、なんだこれは…？」

少年は自分以外は誰も住んでいない、名実共に少年の物である屋敷に戻ると、門の前に手紙を発見した。先程も言った通り少年だけが住む屋敷に使用人等は存在しない。少年は中学生にして一人暮らし

が出来ただけのスキルを持っていたし、一人暮らしが寂しいと思う様な事もなかったからだ。少年は手紙を取って訝しげに見てから開いた

『前略：中略：人質を助けたくば一千万を用意し、御前の私有地にある倉庫まで来い』

ちなみに前略と中略は手紙に本当に書いてあった物だ。

「あー…俺を馬鹿にしているのか、こいつが馬鹿なのかどっちだ？」

少年は溜息をついて人質にされそうな人間を頭の中で思い描いた…のだが。

「……いないな…誰だ…？」

少年には友人、知り合いの類がいなかった。故に人質が誰なのかさっぱり検討がつかない。少年は暫くの間悩んだ後に溜息をついた

「まあ取り敢えず行ってみるか一千万だったっけ、現金とは書いてないし小切手で良いな」

少年はペンと小切手を持って向かう事にした。…したのだが…

「俺の私有地の倉庫って幾つあったっけ…」

少年は軽く鬱になりつつ家の中に入って人質が捕らわれていそうな場所を検索に掛け始めた

「む、このピザは新作か？ 相変わらずやるなーここの出前ピザ」

「俺もそのピザ一つ貰おうかな…へえ、魚貝とチーズがなかなか合うな」

出前が来てから青年は縛られていては食べれないと駄々を捏ねて縄を解いてもらった。男も最初こそ逃げないかと心配していた様だが逃げる様子が全くないので安心したか食事に交ざっている

「んで？ 妹さんだっけ？ 大変だよなあ、そりゃあ誘拐脅迫でもしないと金作れないよな」

「…悪い事だと分かってはいるんだよ…でもどうしても最新設備のある場所で手術が必要なんだ。入院もするだろうし」

「相手はすげー金持ちなんだろ？ 一千万くらい簡単に用意してくれるって。そしたら妹さんも直ぐに元気になるさ」

沈鬱な表情の男に青年がそう言って笑うと、男もつられてフツと笑った

「ああ、そうだな…よし！！ 出前追加だ！！！！」

「…貴様ら…何をやっている…？」

男が携帯電話を手にして電話を掛けようとすると、入口の方から呆

れた様な声が聞こえてきた。男と青年が一緒にそちらを見ると暫く沈黙が訪れる。外は雨らしく雨具を着けている少年を見て、男はまですったなー、と言う表情をしたが直ぐにポケットからナイフと取り出して唐揚げに手を付けている青年の喉の辺りに突き付けた

「人質を返して欲しくば一千万渡せ!!!」

「いや…、それは良いのだが…人質ってそこの弁当食ってる奴の事か…?」

「らしいな」

少年が胡乱気に見ると青年はプチトマトを食べつつ人事の様にそう返した。

「ふむ、おいそこの誘拐犯」

「な、なんだ?」

「この一千万はお前にやるが、代わりに一つ教える」

「はあ…?」

男は訳が分からないと言う様に首を捻った。少年は続ける

「なんでこいつを人質にしたんだ?」

「いや、だって何日か張り付いてて唯一親しそうだったし…」

「…なるほどな……」

男は言いどもってしまつと少年は確かにそうだと納得し、この男が何日も自分を張り込んでいたのに何故気付かなかつたのかと自分に呆れた

「まあ質問に答えてくれた事だし…ほら、一千万で良いんだな？」

「え、いや、ああ、ありがとう」

「ふつ、気にするな。人助けは紳士の役目だ。ピザ貰うぞ」

何故か立場が逆転している感じの二人の不可解か空気が場に充満している。だが、青年も少年も気にする様子は全くない。男は一人で困惑した。なんで誘拐事件だと言つのにこんなに穏やかなのだろうか。

「えっと、警察とかは…？」

「馬鹿かお前は、警察何かに顔を覚えられたら事だぞ」

「俺に関してはこいつのせいで捕まる事確定だな」

つまり皆警察に知られるとやばいので適当になかつた事にしようとしているらしい。なんて平和な誘拐事件なのだろうか何だか成功した気がしない。そして、男が溜息をついたその時、青年は何かを殺気のような物を感じた。

「ん…？ 3人…いや4人か…おい、自販機ブレイカー」

「何だ。食事の邪魔をするなら殺すぞ」

「いや、何かよく分からないがお前誰かに狙われたりしてるか？」

青年がそう聞くと少年は少し考えてから言った

「まあ、日常的に？」

「そうか…」

青年はそう言っただけで倉庫の外に意識を集中した。どうやら厄介な奴に関わってしまったらしい。

「倉庫の外に4人いるぞ？ お前が来てからの気配だし。多分お前をつけて来たんだろうな」

「何…？ 本当か？」

「えっと、何の話だ？」

訝しげに見る少年と訳が分かっていない男を無視して青年が最後のワンピースを取ろうとすると少年がそれを素早くひったくる。それによって少し不機嫌になった青年は続ける

「雨で分かりにくいのが確かにいるな、気配を消そうと頑張ってるみたいだから結構ベテランかもしれない」

「ほお、お前そんなことまで分かるのか、…ふむ、だが困ったな。一人二人なら何とかなるかも知れないんだが」

「…えっ」と…訳が分からないんですが…」

男が困惑しながら言うのを気にもせず、少年はあまり困って無さそうに青年を見た。どうやら先の会話から青年を戦力に出来るかと判断したらしい。

「このままじゃ貴様らも危険だろう。手を組もうじゃないか」

「えー、俺一人なら逃げられるしなあ」

「その男はどうする？ 飯を食わせて貰ったんだろう？」

嫌そうにする青年に少年はそう言って怪しく笑った。

「まあ確かに。しゃーねえな、手を貸すよ。誘拐犯のにーちゃん、あんたは此処にいる」

「え？ あ、ああ。そうさせて貰う」

青年は何も分かってない男にそう言うってから溜息をついた。取り敢えず中で戦うより外で戦う方が男の安全は確保出来る。青年はそう思って先程まで自分に突き付けられていたナイフを取って外へと出た

「…ふむ、そこか」

ヒュン

「ぐあああつ！！！！」

青年の投げたナイフが気配を消して草の中に隠れていた男に当たり、男が悲鳴を上げたのが合図の様な物だったのだらう。屋根の上や木の影から3人の男が現れる

「良いタイミングだな。まあ、いるのが分かっていたら対処は難しくないんだなあ」

青年は誰に言うでもなくそう言って、ゴツイナイフで切り掛かって来る男を見た

「そんな軍用ナイフ引つ張り出して来るなよな……」

ドスッ

「ぐっは……」

「……最低だな……」

青年は男の急所を思いつ切り蹴り上げた。倉庫の中で少年が何か言ったが取り敢えずは聞こえないフリをしておく。青年は怯む男のナイフを奪い取り顔面に回し蹴りを放った

「先は一人、そんでもって」

ザシユッ

「ぐあああああああつ！！！！」

一人がやられる間に背後に回り込んでいた男の方を振り向き、それと同時に先程奪ったナイフで顔面を切り付けた。そしてナイフを最後の男の喉元に投げ付けた

「くっ…」

間一髪でそれを避ける男。だが、男の視線がナイフにいった次の瞬間、青年は男の視界から消えていた。

「なっ！？ どこに…っ！！」

「さようなら。顎砕けるかもな」

声は男の下から聞こえた。そして青年は笑い、肘を使って男の顎を打ち抜いた

ドサッ

「ふう、終わったか……ん…？」

青年が全員倒し終わり気を抜いていると喉に何かを突き付けられた

「貴様…許さんぞ…」

その正体はナイフだった。ナイフは一番最初に青年が投げた物だ。やはり軍用ナイフでないために威力が弱かったらしい

「あ…、俺とした事が気を緩めちまったな。高々一流にナイフを当てられるなんて」

「減らず口を叩くな。…取り敢えずお前から死んで貰う」

男は淡々とそう言った。青年は息を吐いてからいった

「何であいつを殺すんだ？」

「……………」

「ダンマリかよ。まあどーせ遺産がどーとかだろっけどさ。ありきたりだし」

「…死ね」

男はナイフを引いて青年の首を切り裂こうとした。しかし、一向にナイフは青年を切り裂かない

「…っ！！ 動かん！！」

「残念だったな。もったいぶるからやられるんだよ、この三流が」

ゴスッ

青年は左手でナイフを掴んでいた。血が流れていたが気にした様子もなく三人目と同じ様に顎を打ち抜く、そして集中し周りを見渡す

「これで全員か」

「ふふふっ…良くやったぞ人質。何だか知らんが強いなお前」

「どーも」

少年の称賛を受けて青年は軽くそう返した。しかし少年が楽しそうに笑い続けるのを見て青年は嫌な予感を覚えた

「決めたぞ、お前を俺の従者にしてやる。いやあ、ちょうど傭兵でも雇おうて思っていた所だったからな。ちょうど良いじゃないか」

「……………」

その言葉を聞いた途端。何だか自分はこの提案…と言つか狂言に逆らう事が出来ないような、そんな気がした

「はあ…なんで俺こんな所にいるんだろ…」

青年は屋敷の更衣室の中で着替えていた。と言うのも少年に連れて来られたからである。ついさっきの事だった。あの少年は青年が執事などにはならないと断言した途端にこう言ったのだ

『金持ち甘く見ると犯罪者だぞ？ 自販機の罪を御前に被せて警察に突き出してやる。安心しろ、逃げてもちゃんと衛星を使って探してやる』

青年は鬱になった昨日より激しく鬱になった。まあ仕事が出るのはありがたいのだが、執事って何だ？ 何処の世界の職業なんだ？

といった感じで鬱になっているのだ。執事服に着替え終わる。思ったよりも動きやすい格好だ。青年はそのまま応接間へ足を向ける

「入るぞー」

「来たか。なかなか様になってるじゃないか」

「そりゃあどうも」

満足そうな少年に青年は溜息をつきつつそう返した。

「俺はこの屋敷の主、七条しちじょう法火ほっかだ。敬愛の心を持って法火様と呼べ」

「黙れ糞餓鬼、俺は…柳流夜やなぎりゅう取り敢えず飯は3食、睡眠は7時間、仕事はボディガードのみで給料は大企業の社長並みに出しやがれ。それで手をうつてやる」

「乗った」

法火は口端を少し吊り上げて言った。流夜の要求は到底無茶苦茶な物だったが法火にはそんなことはどうでもいい。何かは分からないが予感がした、こいつと居れば退屈しないと。確かに傭兵の様な者が欲しかったが面白い人間であるに越した事はない

「…ったく、契約成立だ、糞主」

「従者らしくないが結構だ、糞執事」

二人の物語は、ここから始まる

(後書き)

初めまして、おはようございます、こんにちは、こんばんは、八神と申します。まずはこの小説の説明を…。何と言いますか、予告編です。本編自体への伏線です。本編は後々出すつもりなので、「あはははは、何この駄文。見苦しいけど」。って言う人はそちらの方は読まないほうが良いです。作者が泣きますから。取り敢えず本編を読みたい人も読みたくない人もこの小説を読んで病気が治った人も感想をくれると嬉しいです。後死にたくなつた人は励ますのでミニメール辺りを送って下さい。短編でもそうですが多々コメディーが目立ちます。そういう物が好きな人が一文字でも多くこの文章を読んでくれる事を望んでいます。長々書いても仕方がないので今日はこの辺で…。それでは本編で会えればまた会いましょう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4889e/>

---

ある日の主、ある日の執事

2010年10月11日20時54分発行